

日本語で教育する10月入学学士プログラム：
NIFEEプログラムの実践

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-05-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 袴田, 麻里 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010069

日本語で教育する10月入学学士プログラム^(注1)

—NIFEEプログラムの実践—

袴 田 麻 里

【要 旨】

NIFEEプログラムは、海外から直接静岡大学工学部学士課程に入学する、留学生特別プログラムである。日本の製造業系企業の海外展開を担う人材を育成することを目的に、平成21年10月から受入れを開始した。海外広報・現地入試、カリキュラム、学生支援・指導など、4月入学の留学生とは異なる体制で34名の入学者を得た。卒業生はプログラムに概ね満足していたが、卒業研究の期間と日本人学生との人間関係構築には問題があった。受入れ学部と日本語教育を担う部署が連携して、日本語・日本文化を身につけた外国人エンジニアを育成するカリキュラムを組んだことによって、NIFEE生は、外国にルーツを持つ工学部生として学士課程を修了した。卒業生は、ほとんどが日本企業に自力で就職した。

【キーワード】 10月入学、外国にルーツを持つ工学部生、日本企業への就職

1. はじめに

外国人高度人材の獲得を巡る国際的な競争が激しくなっている。少子高齢化に伴う労働人口の減少により産業競争力の低下が懸念される日本では、2008年に政府が外国人留学生の受入れを2020年までに30万人とする「留学生30万人計画」を発表した。「留学生10万人計画」と大きく異なるのは、日本社会全体で留学生の「入試・入学・入国の入り口から大学等や社会での受入れ、就職など卒業・修了後の進路に至るまで体系的に」取り組むという姿勢を打ち出している点である。日本社会や産業において継続的にイノベーションを生み出していくためには、外国人を含めた高度人材の存在が不可欠であるが、外国人高度人材の獲得を巡る国際的な競争が激しくなっている中で、日本の大学に在籍している外国人留学生の日本企業への積極的な採用は、有効な方策である。

各大学は英語コースや特別プログラムを設置するなど「入り口」を整備し、日本への留学生誘致を図ってきた。また、経済産業省や文部科学省などの国の機関主導で、大学と産業界とが共同で実施するアジア人財資金構想プロジェクトも開始された。しかしながら、就職希望者の約半数しか就職できていない状況（文部科学省 2016）を鑑みると、日本企業への就職など「出口」で必ずしも期待通りの成果が得られているとは言いがたい。

さまざまな分野で学ぶ留学生の中で、日本語・日本文化を身につけた工学分野の外国人材は、研究開発を担う人材としても、海外事業を展開する人材としても、日本企業・日系企業にもっとも求められる人材である。静岡大学では、平成21年10月より工学分野の勉学を第一目的に、日本語・日本文化の習得も目指す留学生学士プログラムが工学部に設置され、海外に事業展開している日本企業の採用ニーズに合致する人材を送り出してきた。本稿では、その概要を報告する。

2. NIFEEプログラムとは

2. 1. プログラムの概要

NIFEE (National InterFacing Engineers Education) プログラムは、工学分野の勉学を第一目的に、日本語・日本文化の習得も目指す留学生学士プログラムである(定員10名)。日本(静岡県)の製造業の海外戦略を支え、企業が展開する国・地域での日本のプレゼンスを高められる人材育成を目的に掲げ、対象とする留学生は、多くの製造業系企業が進出しているインドネシア、タイ、ベトナムの東南アジア3ヶ国からとした。同時に、日本人学生を優秀な留学生とともに学ばせることによって、日本人学生のグローバル意識を高め、国際対応力のある技術者の育成に貢献することも事業の目的である。

表1：NIFEEプログラム入学者数

		インドネシア	タイ	ベトナム (フェ特別枠)
総計		5	1	28 (11)
1期生 (平成21年10月入学)	男	0	0	2 (2)
	女	0	0	1 (1)
2期生 (平成22年10月入学)	男	2	0	4 (0)
	女	0	0	4 (3)
3期生 (平成23年10月入学)	男	0	0	3 (1)
	女	0	0	4 (2)
4期生 (平成24年10月入学)	男	1	0	1 (0)
	女	0	0	5 (2)
5期生 (平成25年10月入学)	男	0	0	0
	女	1	0	2
6期生 (平成26年10月入学)	男	1	0	1
	女	0	1	1
合計	男	4	0	11 (3)
	女	1	1	17 (8)

静岡大学では平成19年に各学部へ秋季入学の計画の有無についてヒヤリングが行われ、工学部で平成21年10月よりNIFEEプログラム第1期生の受入れを始めた。その後、文部科学省特別経費「国際的に卓越した教育・研究拠点機能の充実」(平成22年度～平成25年度)の助成を受け、平成26年(第6期生)までに3カ国から34名の入学者を得た(表1)。

広報活動は、工学部教員とNIFEE専任職員がJASSO日本留学フェアに参加する、現地日本語学校・現地高等学校へ出向くなどして、大学・学部の紹介や入試情報の提供を行った。入試はインターネットでの出願とし、実際の試験は工学部教職員が対象3カ国へ赴き実施した。

平成20年に静岡大学はベトナムのフェ省教育局・フェ市と協定を結び、それに基づいて現地高等学校長からの推薦を受けた受験者の特別枠(3名以内)を設けた(平成24年まで)。推薦入試の受験者は、学力試験を免除し面接によって選抜された。この特別枠は、少数で

あっても一定数の優秀な受験者を確保することが目的であった。

2. 2. NIFEE生に対する支援とプログラムの実施体制

地方国立大学は海外では知名度が低く、また海外広報のノウハウを持たないため、優秀な留学生の獲得は非常に難しい。学費・生活費の工面、日本語能力、出願手続き・入試など、特に学士課程への留学に対する障壁は高い(山本 2014)。たとえ、インターネット出願や現地入試、推薦枠を設定するなど入学までを整備しても、入学後の経済的な支援は不可欠である。そのため、NIFEEプログラムでは検定料、入学料、授業料を不徴収とし、また宿舎へも優先的に入居できるよう全学的に規則を改定した。その結果、NIFEE生は私費留学生ではあるが、日本留学試験の受験を経て4月に入学する一般の私費留学生とは、選抜方法も支援内容も異なる留学生となった(表2)。また、公益財団法人マブチ国際育英財団より、来日前奨学金の枠をいただくことができた。第1期生は1名であったが、本プログラムの有用性が認められ、第6期生では1カ国につき1名に枠を増設していただいた^(註2)。

表2：NIFEE生と私費留学生の比較(相違点はゴシック)

	NIFEE生	私費留学生
入 試	<ul style="list-style-type: none"> • 日本留学試験(物理・化学120/200点、数学120/200点)が出願基準 ※日本留学試験各科目で基準点以上が出願基準だが、点数不足・未受験者には面接前日に代替学力試験を課す • 日本語能力試験N3合格 • TOEIC500点以上 • 内申点 • 学力試験(面接は3月に母国で) ※推薦入試受験者は面接のみ • 入学検定料 無料 	<ul style="list-style-type: none"> • 日本留学試験(物理・化学120/200点、数学120/200点、日本語270/450点)が出願基準 • TOEIC385点以上 • 学力検査(面接は2月に静岡大学で) ※日本留学試験各科目で基準点以上が出願基準 • 入学検定料17,000円
入学料	不徴収	282,000円
授業料	不徴収(4年間)	535,800円(免除申請可)
宿 舎	<ul style="list-style-type: none"> • 国際交流会館、留学生寮優先入居(1年、ただし推薦入学生は4年) • 民間アパート家賃半額補助 	<ul style="list-style-type: none"> • 国際交流会館、留学生寮入居申請可(1年)

このプログラムを維持・運営していくために、工学部内にNIFEE委員会が設置され、海外広報・入試、教務、学生支援・指導を担当した。委員会は、工学部4学科(平成25年度からは5学科)から選出された教員各1名、工学部留学生担当教員2名、国際交流センター日本語教員1名、工学部教務係長、NIFEEプログラム専任職員1名により組織された。

委員会は、年5～6回程度開催され、海外広報の計画・実施、出願から入学までの手続き、入試問題作成・入試実施、公益財団法人マブチ国際育英財団奨学生の選考、授業担当、寮やアパートの手配と生活管理など多岐にわたる内容を所掌した。

2. 3. カリキュラム

卒業後、日本企業、または日系企業で技術系業務を中心的に担う人材には、日本語の習得、日本文化・日本のものづくりに対する理解は欠かせない。特にものづくりは、工学部のカリキュラム全体を通して身につける概念である。工学部生としての知識・技能に加えて、これらの概念も身につけられるよう、NIFEEプログラムの教育カリキュラムは、①第1学期（入学年10月～翌年3月）、②第2学期～第7学期（入学翌年4月～4年目3月）、③第8学期（4年目4月～9月）から構成された（表3）。

表3：カリキュラム（4月入学生、NIFEE生）

	4月入学生	NIFEE生	
前年度後期	—	基礎日本語Ⅰ～Ⅹ 基礎現代数学演習・基礎物理演習・基礎化学演習・情報処理・新入生セミナー	①
1年前後期	従来カリキュラム	従来カリキュラム	②
2年前後期	従来カリキュラム	従来カリキュラム + NIFEE 教養（日本産業史） + NIFEE 専門（環境・エネルギーと技術）	
3年前後期	従来カリキュラム	従来カリキュラム + NIFEE 教養（社会と製造業） + NIFEE 専門（技術の国際化）	
4年前期	従来カリキュラム（卒業研究）	卒業研究	③
4年後期	従来カリキュラム（卒業研究）	—	

※ゴシックは、NIFEE生のみ対象の科目

①第1学期は、基礎的な教育を行う特別期間である。中心は日本語教育だが、並行して数学・物理・化学の導入教育を行い、国別の高校教育素養の違いを吸収し、②第2学期から第7学期までの3年間、4月入学生とほぼ同一のカリキュラムで学ぶことができるようにした。この3科目については教育内容の違いだけでなく、それぞれの科目の内容を表現する日本語（専門用語を含む）の学習も目的のひとつであった。情報処理は、日本語OSでのパソコン入力に慣れるための導入教育である。このようにカリキュラムを組むと卒業研究に専念する期間が半年となるが、夜間主コースで卒業研究を半年で完成させていた実績から、NIFEEプログラムでも卒業研究を③第8学期の半年間で行い、卒業所要単位数を4月入学生と同じ130単位とした（平成25年度からは126単位）。

NIFEE生は入学時に学科配属されるが、第1学期は「仮配属」であった。これは、海外から直接入学を望む受験者（多くは高等学校在学中、または卒業直後）が、各学科での勉学内容を十分に理解して学科を志望することについて疑問があったためである。入学後にミスマッチが判明しても、転学科は容易ではない。そのため、仮配属の第1学期に「新入生セミナー」を実施し、そこで各学科の勉学内容や特色、研究室を紹介した上で、第2学期以降に本配属となる学科を決めさせる制度とした。

また、日本企業・日系企業で技術者として活躍できる人材育成のためには、日本の産業界に対する理解が不可欠である。そのため、第2学期（入学翌年4月）以降、NIFEE教養科目を2科目、NIFEE専門科目を2科目必修とし、日本の産業の歴史や世界の動向などに目を向けさせた。これらの科目では、産業界との連携のもと、企業から講師を招聘したり、企業見学を実施したりするなどして、日本のものづくりの背景、品質管理・生産管理に対する理解を促した。

3. 日本語力と日本語教育

3. 1. 日本語力

NIFEE生は第2学期以降、4月入学生と同一のカリキュラムに組み込まれるため、第1学期に日本語を集中的に学び日本語能力試験N2以上に日本語能力を向上させることが求められた。

出願時（入学前年12月中旬）の日本語力は、N5、またはN4が多く、初級程度であったと推測される。出願要件はN3合格、またはN4であれば135点以上であったが、日本語能力試験の成績公開時期と入試時期との整合性がないこと、また受験歴があっても若干成績が不足する科目が含まれている受験希望者には代替試験を課することとしたため、初級程度の日本語力の受験者が多くなった（表4）。その後、入学時（入学年10月）に行った日本語プレースメントテスト（N3相当）の結果から、第1学期開始時はN4からN3程度の日本語能力であったと推定できる。

表4：NIFEE生の日本語力

	入試日本語科目（N4程度）の 平均得点率（除 フェ特別枠生*）	プレースメントテスト （N3程度）の平均得点率	基礎日本語期末試験 （N2程度）の平均得点率
第1期生	—	64.5%	78.0%
第2期生	66.9%	61.2%	70.7%
第3期生	32.3%	50.6%	77.5%
第4期生	45.8%	72.3%	84.4%
第5期生	33.3%	53.5%	80.9%
第6期生	49.8%	83.9%	82.8%

*フェ特別枠で推薦入学したNIFEE生は面接のみで選抜

3. 2. 日本語教育

第1学期の日本語教育は、基礎日本語10科目（文法・語彙4科目、作文2科目、聴解・会話・速読・科学日本語各1科目）をそれぞれ有機的に連携させて1つのコースとし、国際交流センターがコーディネートして実施した。表現したいことを適切に表現できるようになること、文法、語彙とともに学部生としての勉学に必要な漢字を習得することが学習目標である。

同時に、日本語で日本人学生と円滑にコミュニケーションできるようになることを目的

に、プロジェクトワークとして、①日本人学生にインタビューを実施しレポートにまとめるタスク、また、工学部学生後援会の補助を得て②日本人学生を招待して忘年会を企画・実施するタスクも、日本語コースに組み込んだ。

第1学期は、日本語科目の履修が中心となるため、学生指導の一部を日本語コースでも行った。NIFEE生は、来日時の日本語能力が学部入学レベルではないこと、年齢が低く精神的に不安定であることを考慮して、国際交流センターと工学部との連携を強化した。具体的には、指導教員とNIFEE委員会へ日本語プレイスメントテストの結果、中間・期末試験の結果、履修状況を送付し、工学部教員がNIFEE生の日本語能力を把握することを促し、国際交流センターと工学部が相互に連絡を取り合いながら、半年間の日本語指導にあたった。

4. 学業成績

平成28年10月現在、修業年限となったNIFEE生は27名であり、そのうち20名が修業年限（4年）内で学士課程を修了した。修業年限内で修了できなかった7名のうち、1名が進路の迷いにより自主退学、1名が1年間の留年を経て卒業、5名が修業年限を超えて在籍中である（表5）。

表5：修業年限内での卒業生数

期別入学生数		卒業生数	備考（H28.10.現在）
第1期生	3	3	
第2期生	10	5	1年留年して卒業1名、留年継続4名
第3期生	7	6	進路の迷いにより退学1名
第4期生	7	6	1年留年1名
第5期生	3	—	
第6期生	4	—	

NIFEE生は第2学期から4月入学生とともに、工学部の従来カリキュラムに沿って3年間学ぶ（表3②）。この3年間で第1期生から第4期生までのNIFEE生とともに学んだ私費留学生（外国政府派遣留学生を含まない）は、すべて日本語学校を経ての入学者であった。表6は、NIFEE第1期生から第4期生と、同じ時期に学んだ私費留学生の成績を比較したものである。各年度の個々の学生のGPAを合算し人数で割って比較した。これを見ると、NIFEE生は私費外国人留学生入試を経て入学する私費留学生と選抜方法が大きく異なるが、工学部での勉学においては両者にはそれほど差がないと言える。また、NIFEEプログラム修了者21名のうち13名は修士課程に進学したが、11名は成績上位者であったため、自己推薦型入試によって静岡大学工学研究科（平成27年度以降は総合科学技術研究科工学専攻）に進学した。

表6：年度ごとのGPA（平均）

	第1年度 (NIFEE生は入学1年目 4月～翌年3月)	第2年度 (NIFEE生は入学2年目 4月～翌年3月)	第3年度 (NIFEE生は入学3年目 4月～翌年3月)
NIFEE生(27名)	2.346	2.034	1.985
私費留学生(16名)	2.481	2.375	2.093

5. プログラム実施の効果と課題

5. 1. 卒業後の進路

表7は、学士課程を修了したNIFEE生の進路を示したものである。学士課程を修了し修士課程へ進学しなかった7名のうち6名が日本で日本企業に就職した。また、日本人学生と同じように修士課程へ進学するNIFEE生が多いが、本学修士課程へ進学した元NIFEE生7名は課程修了後日本で日本企業に就職した。

日本で就職したNIFEE生、元NIFEE生に対する就職支援は、工学部に所属する日本人学生と変わらなかった。留学生に対する就職支援の必要性が明言されるようになって久しいが、実は「留学生支援に積極的な大学ほど、留学生に特化しない支援への移行を志向する傾向」(新日本有限責任監査法人 2015)が指摘されている。静岡大学、また工学部には就職支援のノウハウと実績があり、またキャリア教育もカリキュラムに組み込まれている。就職を希望したほとんどのNIFEE生、元NIFEE生が内定を得られたのは、学内外で利用可能なこれらの就職支援を有効に活用して日本人学生と同じように就職活動に臨めたためである。理系の高度外国人人材に対するニーズは高く個別に求人があるほどだが、工学部生を対象とした求人のほうが圧倒的に数が多く、また多種多様であることは言うまでもない。NIFEE生は、「工学部の留学生」ではなく「外国にルーツを持つ工学部生」として自ら企業を選択して就職活動に臨み、その能力と属性が評価されたと推察する。

しかしながら、この13名のうち、静岡県の企業に就職した卒業生は1名であった。地元静岡県の製造業の海外戦略を支える人材の送り出しは、今後積極的に取り組むべき課題となるだろう。

表7：NIFEE生の進路

期別卒業生数	日本で日本企業に就職 (内定を含む)	進学	帰国	就職活動中	備考
第1期生	3	3			修士課程進学3名は修了後日本で日本企業に就職
第2期生	6	2	4		修士課程進学4名は修了後日本で日本企業に就職
第3期生	6	1	4	1	進学4名のうち1名は他大学修士課程へ進学
第4期生	6	3	2	1	

5. 2. 日本語力

入学したNIFEE生34名には、第2学期開始時にOPI（Oral Proficiency Interview^(注3)）を行い、日本語運用力を測定した。NIFEE生入学の翌年4月に入学した私費留学生23名も同様にOPIを行い比較した。また、第1期と第2期の9名のNIFEE生には、卒業直前の第8学期に再度OPIを行い、3年半前と比較した（表8）。静岡大学工学部に入学した私費留学生が出願時に提出した日本留学試験の日本語科目（聴解・聴読解、読解、記述）の平均点は、344点とかなり高い。NIFEE生の入学時の日本語力はN3程度であり、私費留学生に比べ明らかに低いが、卒業時にはOPI上級となっていることから、日本語の運用力が確実に向上したことが分かる。また就職したNIFEE生、元NIFEE生は、多くの企業が求める日本語能力試験N1など、公的に日本語能力を証明する試験に合格しており、理解力も向上したことがうかがえる。

表8：入学時と卒業時の日本語力

	私費留学生 (23名)	NIFEE生 (34名)		NIFEEプログラム修了者が 求職時に履歴書に記載した資格
	入学年4月	入学翌年4月	卒業時	
中級－中	2	4	0	JTEST準A = 1名 JLPT N1 = 9名
中級－上	2	18	0	
上級－下	7	11	4	
上級－中	9	0	3	
上級－上	3	1	2	

一方で、6名のNIFEE生が留年した。表4を見ると、特に留年生が多い第2期生は基礎日本語期末試験の得点率が他の年度よりも低いことが分かる。そこで、第1期生から第4期生までを、修業年限内で卒業した学生と留年した学生とに分け、日本語プレイスメントテストの得点率と基礎日本語期末試験の得点率を比較してみた（表9）。

表9：4年で卒業したNIFEE生と留年したNIFEE生の日本語得点率

	人数	プレイスメントテスト (N3程度)の平均得点率	基礎日本語期末試験 (N2程度)の平均得点率
4年で卒業	20	66.2%	80.5%
留年生	6	65.7%	64.1%

表9を見ると、プレイスメントテストの得点率は、4年で卒業した学生も留年生も大きな違いはないが、第1学期が終わっての基礎日本語期末試験の得点率は大きく異なっていることが分かる。つまり、留年した学生は、日本語を集中的に学ぶ第1学期に、想定したレベルまで日本語能力が向上しなかった。彼らには、工学部からの要請を受け、基礎日本語

期末試験終了後の春休みに1ヶ月間の補講を行い、日本語能力の補強を図ったが、第1学期での日本語能力の伸び悩みが、第2学期以降の勉学に影響を与えた可能性は高いと思われる。

5. 3. NIFEEプログラムの評価

学士課程を修了し卒業した第1期生から第4期生までのNIFEE生を対象に、NIFEEプログラムに対するインタビュー調査を行った。対象となる21名のうち、18名から回答を得た。

5. 3. 1. 支援体制について

NIFEEプログラムは、工学部に設置されたNIFEE委員会が学生募集・入試、学生支援・指導を所掌し、表2に示したようにNIFEE生にはさまざまな優遇措置が与えられていた。このような体制は、日本人学生やNIFEE生以外の留学生にはないものである。特にNIFEE生は検定料、入学料、授業料の不徴収、宿舎への優先的入居など、経済的な支援が手厚かった。このような経済的な支援については、すべての回答者から「入学金、授業料不徴収でよかった」「(家賃補助があるので)家賃が安かった」など肯定的な回答が得られた。ただ、4年間授業料が不徴収であるよりも「毎年成績をチェックして不徴収としたほうがよい」という意見があった。これは、第2期生のうち5名が成績不良であったにもかかわらず、規定通り授業料が不徴収であったことを踏まえてのものである。

また、学費や家賃の支援はあったが、生活費は自分で工面しなければならなかったため、奨学金を得られなかったNIFEE生はアルバイトをした。その結果、「バイト先で友達ができた」などよい点もあったが、「アルバイトの時間が長い」「バイトしながら勉強するのはプレッシャー」などマイナスな面もあった。

学生支援・指導においては、多くがNIFEEプログラムを担当する教職員からのアドバイスや指導を役立った、有用だったと評価した。しかし、第1期生、第2期生からは「面倒を見すぎている」「普通の学生として接してほしい」など特別扱いに戸惑う声も上がった。また、「9月卒業に対するビザや住居などの支援が足りない」という意見もあった。在留は内定した企業の申請により引き続き可能となる場合があるが、留学生住宅総合保障は学籍を離れると加入できないため、入社までの期間の住居が確保できない。10月入学の留学生受入れを継続するのであれば、早急に対処方法を検討すべき問題である。

5. 3. 2. カリキュラムについて

5. 3. 2. 1. 第1学期

第1学期の集中的な日本語教育に対しては、回答者全員が必要であり役に立ったと評価した。だが、第2学期になって講義を聴くこと、レポート等を書くこと、日本人学生と話すことに対して、程度の差はあれ不安があったとのことである。そのため、3名からは「半年では足りない」「1年間のほうがよい」という回答もあった。しかし、「日本語が上達してからは友達ができて成績もよくなった」など、学年が進行するにつれてほとんど心配がなくなり、卒業研究のために研究室配属された時にはほとんど心配がなかったという回答で

あった。

基礎現代数学演習、基礎物理演習、基礎化学演習、情報処理については、「高校の復習が日本語の勉強になる」という当初の狙い通りの回答もあったが、「高校の復習なので簡単だった」「4月から重なる内容の科目があった」という回答もあった。

工学部は静岡大学の中でも留年率が高い学部である。留年者の多くが、1年次・2年次に履修する「理系基礎科目」という科目群の履修に問題を抱えている。理系基礎科目を設定されている学期に単位取得した、または「不可」が1科目の場合は4年で卒業できるが、「不可」が2科目以上に渡るとほぼ留年する。特に1年次に設定されている理系基礎科目は、日本の高等学校での教育課程を踏まえての学習内容となっている。私費留学生は日本留学試験を受験して入学するため、日本国内の日本語学校などで受験対策としてある程度日本の高等学校までの教育内容を学んでいる場合が多い。一方で、母国から直接入学する外国政府派遣生の多くが理系基礎科目の単位取得に問題がある。そのため、日本国内の日本語学校を経ずに母国から直接入学するNIFEE生にも困難があるものと予想された。

しかしながら、表10を見ると、NIFEE生の理系基礎科目の単位取得の傾向は、同じ時期に学んだ私費留学生に類似していることが分かる。これは、基礎現代数学演習、基礎物理演習、基礎化学演習の授業担当者が、翌年4月以降に理系基礎科目を担当する工学部教員だったことが大きな理由であったと推測される。工学部生としてのレベルを熟知した教員が4月以降の勉強内容を踏まえて授業を行ったことにより、効果的な準備教育となったのではないだろうか。残念ながら留年したNIFEE生6名は、「不可」が2科目以上であった。

表10：理系基礎科目で「不可」だった割合

	NIFEE生（第1－4期生）	外国政府派遣生	私費留学生
	10月入学：平成21年度～24年度	4月入学：平成22年度～25年度	
「不可」なし	63.0%	14.3%	64.3%
「不可」1科目	11.1%	28.6%	7.1%
「不可」2科目以上	25.9%	57.1%	28.6%

5. 3. 2. 2. 第2学期から第7学期

4月入学生と同じカリキュラムとなる3年間についての回答からは、学科やコースによって内容の違いはあるが、「実習や実験は楽しいけどレポートが大変」「90分で教える内容が多すぎる」「スライドを流して話す授業は（理解が）大変」など、どのNIFEE生も苦労しながら工学部生として学んだことが分かった。この3年間には、日本の産業やその歴史、世界の動向について学ぶNIFEE教養科目とNIFEE専門科目がそれぞれ2科目ずつ必修科目として設定されていた。これらの科目に対する評価は、大きく分かれた。内容に対しては、「工学に関係がないから興味が持てない」という否定的な意見と、「専門外のことを学べてよかった」という肯定的な意見がそれぞれあった。また、「内容はいいが、授業のやり方に問題があると思う」という意見がある一方で、「日本語に配慮した授業で学べてよかった」

という意見もあった。日本企業・日系企業で技術者として活躍するためには、日本の産業界とそれを取り巻く状況を理解し、自ら考えて行動できることが重要だが、その意義が一部のNIFEE生に十分に理解されていなかった可能性がある。

5. 3. 2. 3. 第8学期

4月入学生が2学期間を費やす卒業研究を1学期間で行うことには、ほとんどのNIFEE生が「半年では厳しい」「4ヶ月では不安」など、期間に問題があることを指摘した。「先生の理解があれば大丈夫」「時間が足りた」という学生も2名いたが、「1年にして（全課程を）4年半にしてほしい」「10月（第7学期）から研究室に入りたい」など、4月入学生と同じように1年間を使って卒業研究に取り組みたかったという意見が多かった。1学期間とはいえ、実質的には4ヶ月間で研究計画を立て卒業論文にまで仕上げなければならない。そこへ「院試の勉強もある」「就活と卒研が重なって」いれば、体力的にも精神的にも厳しい状況であったことは想像に難くない。

5. 3. 3. 同級生としての日本人学生

NIFEEプログラムのもうひとつの目的は、日本人学生を優秀な留学生とともに学ばせることによって、日本人学生のグローバル意識を高め、国際対応力のある技術者に育成することであった。そのため、NIFEE生と日本人学生との交流は重要だが、残念ながらNIFEE生の日本人学生に対する評価は厳しいものが多かった。

勉学姿勢に対して、「可」でいいなど向上心が低い「よく寝る」「先生の質問に答えない」「積極的でない」など否定的な回答が並んだ。外国で自活しながら、外国語で新しい概念を学ぶことは容易なことではなく、多大な努力と向上心がなければ卒業はおぼつかない。そうやって卒業までこぎつけたNIFEE生が、日本人学生の勉学姿勢を否定的に評価したことは当然であろう。

さらに問題だと思われるのは、「外国人とあまり話したくない雰囲気」「知り合っても男女ともあいさつしてくれない」「（日本人学生は）自分から接しない」「実験は話すようになるがそれ以外の場では話さないまま」など、同じ課程で学んでいるにもかかわらず、人間関係の構築が困難であったことが推測される点である。「毎日授業で3～5人に話しかけたが友達になるのが難しい」「話しかけても返してくれず次に続かない」など、NIFEE生は日本人学生に働きかけていたが、それに対する日本人学生の反応が悪かったことが分かる。少数ながら「優しい」「困っていたら教えてくれる」という意見や、「男子多いから」「いろいろな人がいる」「話したい気持ちはあるみたい」など理解を示すNIFEE生もいるが、NIFEE生が日本人学生から受けた印象は、芳しくないと言わざるを得ない。

多くの外国人留学生は、「日本人の友達と学ぶ」というイメージをもって来日すると推測する。「研究室に2、3人仲いい」など研究室に配属されてからは、研究室仲間として人間関係を構築できていたことがうかがわれるが、言い換えれば、最後の半年になるまで同じ学科・コースの日本人学生との付き合いが希薄であったということである。NIFEE生は「学ぶのは新しいことばかりなのだから正しいか間違っているか話し合いながら勉強するほうがいい。日本人は間違いが怖いみたいだけど、間違いに気づくチャンスなのに（残念だ）」

というコメントが示すように、ともに学びたいという気持ちを持っていた。講義にグループワークを取り入れ、教室の外にもスタディー・グループを作れば「勉強の時間が友達との時間になる」という提案もあった。

第4期生に、自分の存在が日本人学生に影響を与えたと思うかと質問したところ、「(日本人学生が) 留学したいと言うようになった」「ベトナムの文化を教えた」などの回答もあったが、「分からない」という学生もいた。また、この質問に対して「(日本人学生は) 英語(学習)のために外国人留学生と話したいみたい」というコメントもあった。英語の母語話者でないとは分かるのとそれ以降付き合いがなくなり、「(自分は) 英語は普通に話せるのに差別みたい」と感じたそうである。

3年間同じ課程で学んでいれば、留学生本人の意図とは別に、日本人学生に対して何らかの影響を与えていると思われるため、波及効果がなかったとは言えない。しかしながらその効果は限定的であった、または小さかったと推察される。現状では、日本人学生のグローバル意識を高め、国際対応力のある技術者に育成できているのかには疑問が残る。アジア人財資金構想においても、留学生と日本人学生との交流不足によって日本人学生の内なる国際化が促されていないと報告されている(経済産業省 2013)。留学生の存在によって日本人学生に対する刺激を有効にするには、マジョリティ側である日本人学生への教育が必要であろう。

5. 3. 4. 満足度

4年間を終えてのNIFEEプログラムの満足度は、表11の通り、概ね良好であった。満足な理由は「4年で卒業できた」「勉強をがんばった」、「一人暮らしをがんばった」といった勉学面・生活面での達成感、「お金の面で満足」「親に負担をかけなかった」など経済面での支援に対してであった。マイナスとなったのは「日本人の友達が少ない」という日本人学生との人間関係と、「卒研が短い」「本当にやりたいテーマができなかった」という卒業研究に対するものが主だった。

表11：NIFEEプログラムの満足度

満足度	95%	90%	85%	80%	75%	70%	65%	60%
人数	1	1	4	7	1	3	0	1

5. 3. 5. まとめと課題

平成21年度に開設した工学部NIFEEプログラムは、日本企業の多くが事業を展開しているインドネシア、タイ、ベトナムを対象とした10月入学の学士プログラムである。それまで国立大学があまり行っていなかった海外広報・現地入試を受入れ当該学部の教職員が直接出向いて行うことによって34名の入学者を得た。地方国立大学の学士課程へ海外から直接入学する道を開拓したことは、評価すべき点である。しかしながら、海外広報・現地入試は、教職員の移動だけでも多額の費用がかかる。一部局で今後も継続することは困難

であることはもちろん、費用対効果の点でも大きな問題がある。海外での広報活動は、大学全体として、また自治体や他大学と連携して行い、入試はインターネットを介して行うなどの工夫が必要である。

NIFEEプログラムでは、第1期生から第4期生まで、静岡大学とフエ省教育局・フエ市との協定のもと、推薦入試（フエ特別枠）を実施した。これは、海外で知名度が低い地方国立大学が、安定して優秀な受験者を確保する手段として非常に有効であったと思われる。海外の大学との交流協定に基づくダブルディグリープログラムなど、大学院レベルでは特定の教育機関から優秀な留学生を受入れるノウハウがある。このノウハウを生かし、学士課程においても海外からの推薦入試の可能性を検討すべきではないだろうか。

日本留学試験を経て入学する私費留学生と比べ、明らかに日本語能力が低い留学生が入学することがNIFEEプログラムの最大の懸念であった。しかしながら、第1学期に集中的に日本語教育を行い、学部での勉学に耐えうる日本語力を身につけさせることにより、優秀な成績で課程を修了できることが分かった。一方で、この第1学期で日本語が想定したレベルまで伸びない場合、留年の可能性が高まると推測される。NIFEE生の場合、入学時の日本語力に大きな差はなかったことから、入学後、モチベーションを保ちつつ、確実に日本語能力を伸ばすコース設計が求められる。

卒業するNIFEE生のインタビューから、教育内容や支援体制を含め満足度の高い4年間だったことが分かった。しかしながら、卒業研究の期間と日本人学生との付き合いには不満があった。修業年限を変更することは難しいが、留学生と日本人学生の交流を促すことは、工夫次第で改善が可能である。幸いなことに、毎年5～10名の工学部生が夏季・春季休暇に大学の制度を利用して短期留学している。また、必修科目が多い工学では、これまで交換留学に挑戦する学生が少なかったが、平成21年には1名だった協定校への交換留学（半年以上1年未満）も徐々に増加している。大学の制度を利用せずに留学したり、海外でボランティアなどの活動に参加したりする工学部生もいるだろう。自身が留学を経験していれば、日本に来ている留学生の立場や心情に共感できる。留学経験者・海外経験者を増やし、彼らを核として日本人学生と留学生が同じ学科・コースの仲間としてともに勉学に励む雰囲気を作り出す仕掛けも検討すべきである。

NIFEE生は、表7に示した通り、平成28年10月までに21名が卒業し、そのうち13名が日本企業に就職した。日本企業の海外展開を支える人材を育成するというプログラムの目的を十分に果たしていると言えよう。留学生の就職支援では日本語力の不足が問題点として指摘されてきたが、NIFEEプログラムは、受入れ学部と日本語教育を担う部署の連携によって、工学部生としての勉学とともに日本語能力も向上させるカリキュラムを組むことができた。その結果、NIFEEプログラム修了生は学内外の就職支援を有効に活用して、日本人学生と同じように「工学部生」として就職活動を行い、就職を果たした。NIFEE生は日本語・日本文化を習得し、外国にルーツを持つ「工学部生」として学士課程を修了した。卒業生は、日本文化や日本人の考え方・行動様式を肌感覚で知る外国人エンジニアとして、産業界での活躍が大いに期待される。

6. 結び

NIFEEプログラムは、静岡大学工学部が入試・入学・入国の入り口から就職など卒業・修了後の進路に至るまで体系的に取り組み、平成26年度の入学者をもって受入れを終了した。平成27年度からはアジアブリッジプログラムという全学での取組みとなり、全6学部での留学生10月入学プログラムへ発展した。また理系修士課程では改組を機に平成27年度に10月入学の英語コースを開設し、主としてアジアからの留学生の受入れを始めた。日本語能力不問での受入れであるため、留学生の卒業後の進路はNIFEE生に比べて著しく限定される恐れがある。しかしながら、英語コース開設によって、静岡大学の留学生数が331名（平成26年度10月）から、407名（平成28年度10月）に増加した。同じ研究室で留学生とともに研究に励む日本人学生が増加し、キャンパスで留学生を見かけることが普通の光景となった。同時に、主として4月入学生を対象に講義が英語で提供される副専攻の課程が、学士課程、理系修士課程において組まれた。これまで英語で提供される講義は極めて少なかったが、副専攻の講義を履修することによって、日本人学生が「グローバル」「国際化」「アジア」に関心を持ち、同じ学科・コースの留学生とともに勉学に励むようになることを期待したい。

- (注1) 本稿は、平成26年5月30日に東京海洋大学で行われた、国立大学日本語教育研究協議会情報共有セッションでの発表「学士課程での日本語教育の実践」を大幅に加筆修正したものである。
- (注2) 平成27年度開設のアジアブリッジプログラムの工学部留学生にも引き続き、ご支援をいただいている。
- (注3) 『ACTFL-OPI入門 一日本語学習者の「話す力」を客観的に測る』（2001、牧野成一ら）を参照

参考文献

- 経済産業省経済産業政策局産業人材政策課（2013）『「アジア人財構想」事業結果まとめ（平成19年度～24年度）』
- 新日本有限責任監査法人（2015）『外国人留学生の就職及び定着状況に関する調査』
- 松本隆宇（2009）「静岡大学工学部秋季入学留学生プログラムの試み」『留学交流』6月号、Vol.21、pp.6-9、独立行政法人日本学生支援機構
- 文部科学省（2016）「外国人留学生の就職促進について（外国人留学生の就職に関する課題等）」外国人留学生のキャリア教育・就職支援についてのセッション配布資料、http://www.jasso.go.jp/gakusei/career/event/guidance/_icsFiles/afieldfile/2016/06/29/12_h28guidance_ryugakuseission_monkasyou.pdf（平成28年11月25日閲覧）
- 山本剛（2014）「タイの学生から見た日本留学の障壁 ー留学生受入れ計画のボトルネックとはー」ウェブマガジン『留学交流』5月号、Vol.38、http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2014/_icsFiles/afieldfile/2015/11/18/201405yamamotogo.pdf（平成28年11月25日閲覧）

**“NIFEE” Undergraduate Program of Engineering in Japanese Language
— October enrollment from overseas —**

HAKAMATA, Mari

This paper is the report about the October enrollment program called NIFEE in the Faculty of Engineering. It started from 2009 October and accepted 34 students until 2014. The NIFEE program paved the way for international students enrollment from overseas. The curriculum and student-support were designed by the Faculty of Engineering along with the International Center. Although NIFEE students expressed difficulties in building good relationships with Japanese students and completing their thesis in one semester, all students were satisfied with the curriculum and university support. Currently, 21 students graduated and 13 have found a job by themselves at companies in Japan. It shows the NIFEE program accomplished its goal to foster international engineers who will be playing an active part in Japanese manufacturing industry.